現代フランス語における代名動詞について

松　田　孝　江

はじめに

代名動詞が見せる様相は，多種多様で複雑である。ここでは，それについて系統立った，理論整然とした解釈を試みるのではない。具体的に個々の動詞をとりあげて，その問題点を探ってみようと思う。そうしたものの積み重ねが，複雑な代名動詞の一面を照らし出してくれれば，と願う試みである。

1. tuer と se tuer

言葉の意味や用法を分析していくときの一つの方法として，その言葉が主体との関係において意志的であるか無意志的であるか，という視点がある[1]。たとえば日本語で「殺す」と「死なせてしまう」を較べた場合，「殺す」は意志的で，「死なせてしまう」は無意志的であるといえよう。

フランス語の tuer をこの観点からみてみると，意志的な「殺す」と無意志的な「死なせる」の両方に使われることがわかる。Robert Méthodique では tuer のこの二つの意味を次のように説明している。

1°—a　faire mourir (qqn) de mort violente.　　乱暴なやり方で（人を）殺す。

L'assassin l'a tué à coup de couteau.

暗殺者はナイフで一突きして彼を殺害した。

1°—b　donner involontairement la mort à (qqn).　　過失で（人を）死なせる。

Il a tué son ami au cours d'une chasse.

彼は狩猟遊びで友人を死なせてしまった。

日本語では，意志的には「殺す」であっても，無意志的には「死なせてしまう」であり，両者を使いわけるのが普通であろう。

ところで tuer の代名動詞 se tuer にもこの双方が反映されていて，同じ動詞の中に意志的と無意志的のいわば対立するような意味が含まれている。Robert Méthodique の se tuer の項をみてみよう。

1°—a　se suicider. 自殺する。

Il s'est tué d'une balle dans la tête.

彼は頭に一発打ち込んで自殺した。

1°—b　être victime d'un accident mortel ou être cause de sa propre mort par accident.

死亡事故の犠牲になる，または自分のせいで事故死する。

Il s'est tué dans un accident de voiture.

彼は自動車事故で死んだ。

1°—a は意志的，1°—b は無意志的な死である。1°—b について，être cause 以下の説明は明らかに“自分自身の過失による死”をいっているが，être victime はどう解釈したらよいのだろうか。これについて，同じ Robert 系の辞書，Petit Robert は次のように説明している。

1°—b être victime d'un accident mortel (surtout quand la personne a une part de responsabilité dans l'accident). （特に当事者に事故の責任の一端があって）死亡事故の犠牲になる。

つまり se tuer の無意志的用法は，同じ事故死でも，事故の責任が当事者自身にあるというニュアンスを含むのである。ここで tuer と se tuer を意志的と無意志的の観点から整理してみよう。

意志的→他動詞：（人を）殺す→代名動詞：自殺する。

無意志的→他動詞：（過失で人を）死なせる→代名動詞：（みずからの過失で）死ぬ破目になる。

みずからの過失により，意に反して死ぬ破目になるのが se tuer ならば，病気その他で死ぬ場合は mourir となろう。

「君が僕と結婚してくれないなら，僕は死んでしまう。」の「死ぬ」は，フランス語では主語の気持のありようによって変ってくる。

(1) Si tu ne veux pas te marier avec moi, je me tue.
もし君が僕と結婚したくないなら，僕は死ぬ。

(2) Si tu ne te maries pas avec moi, je mourrai de chagrin.
もし君が僕と結婚してくれないなら，僕は悲しくて死んでしまうよ。

(1) の se tuer には，主語の強い意志が表われていて，「死んでやるから」といささか強迫めいた調子になる。(2) の「悲しくて死んでしまう」には，みずからの意志は表われていない。

(3) Il s'est tué il y a trois ans.
彼は三年前に死んだ。

(3) の文は言外に，自殺か事故か，いずれにしろ病死ではないことを物語っている。“普通でない死に方をした”ということになる。

(4) Il s'est tué dans un accident de voiture.

(5) Il a été tué dans un accident de voiture.

(6) Il est mort dans un accident de voiture.

(4) (5) (6) はいずれも「自動車事故で死んだ」であるが，se tuer を使った (4)の文が，事故の責任の一端は主語自身にある，というニュアンスを含んでいるのにはたいし，(5) (6) にはそうしたニュアンスはない。日本語では「過失致死」という言葉があるが，これも他人に対しての責任をいうのであって，se tuer dans un accident と，être tué または mourir dans un accident の違いを区別できる動詞はないようである。

2. mourir と se mourir

ある種の自動詞は，自動詞と代名動詞では意味が違うとされる。mourir の代名動詞 se mourir は，Robert Méthodique によれば，“être sur le point de mourir” とある。mourir が「死ぬ」で，se mourir は「今にも死にそうだ，死に瀕している」ということになる。

しかしながらフランス語では現在形という時称は，現在を中心に過去や未来の広い範囲を表わし

うることが知られている。その点をふまえて言えば，mourir と se mourir の違いは，語義の違いというより，se mourir は mourir の中に含まれるアスペクトを限定したものである，といえよう。継続・進行のアスペクトは単純形 mourir でも表わせないわけではないが，mourir の中から特にそのアスペクトだけを取り出したものが se mourir なのである。

(1) Je meurs dans un an.
私は一年後に死ぬ。

(1) の文を，*Je me meurs dans un an. と置きかえることはできない。se mourir には現在時称と，"過去における現在" を表わす時称である半過去の二つの時称しか用いられないという制約があり，mourir の現在が持つような，広範囲な時を表わすことはない。

ところでイヨネスコの戯曲に，*Le Roi se meurt*『瀕死の王』というタイトルのものがある。この中で王は次のように言う。

Le Roi : Je meurs. — *Le Roi se meurt*, 98.

Le Roi : Je me meurs. — *Ibid.*, 100.

苦悩する王は，ことあるごとに，「もう駄目だ，俺は死ぬぞ。」と "Je meurs." を繰り返すのであるが，その中で一度だけ上記のように "Je me meurs." と代名動詞を使っている。この戯曲では，王は終始死の恐怖に苛まれ苦しんでいる。その意味では，多発される "Je meurs." という現在形も，"être sur le point de mourir."「死にそうだ」という進行のアスペクトととるのが自然であろう。その中であえて "Je me meurs." と言うとしたら，単純形との違いはどこにあるのだろうか。それは語義の問題ではなくて，表現性の問題となってくる。一種強調的な表現なのである。ヴァルトブルクは，古フランス語の代名動詞の役割の一つとして，「強さの表現としての再帰代名詞」なるタイトルのもとに，次のように述べている(2)。

それらのいろいろな例で，動詞の意味は，代名詞があってもなくても同じである。しかし再帰代名詞を用いて，主語が行為に対して自分の全力を，あらゆる活動力を投入していること，彼がそれに特別の関心を抱いていることが示される。再帰代名詞は動詞に特殊な強さを与えるのである。なおこのような強さの表現は，イタリア語では今日まで保存されている ("Godo del sole.", "Mi godo il sole."「私は太陽を楽しむ」)。

イヨネスコの描く王が "Je me meurs." と悲痛な叫びを上げるのは，真に迫った心の響きを伝えるためであろう。しかし Robert Méthodique, Petit Robert, Lexis などでは，se mourir には<文章語>と付記されている。"Je me meurs." という言葉も，実は発話者が王だからであって，これが廷臣ならば，"Je vais mourir." か "Je mourrai." となったかもしれない。

3. aller と s'en aller

移動を表わす自動詞の中には，s'en を添える形での代名動詞をもつものがある。その場合，単純形と代名動詞形の意味の違いはどうであろうか。ここではよく使われる aller と s'en aller についてみてみよう。Trésor de la langue française では，aller と s'en aller を次のように定義している。

aller — 〔Le verbe marque un déplacement depuis un point de l'espace jusqu'à un autre〕 se mouvoir, se déplacer.

〔この動詞は，ある地点から他の地点への移動を表わす。〕「動く」「移動する」ことである。

s'en aller — 〔Une limite initiale de l'action est envisagée ; le terme du mouvement est parfois

implicite〕partir du lieu où se trouve le sujet en question (pour se rendre dans un autre lieu).

〔動作をその起点において捉えたものである；到達点が，時に，言外に含まれていることもある。〕当の人物が，その時いる場所から（他の場所へ行くために）立ち去ること。

ちなみに Bordas の synonymes 辞典で s'en aller を引くと，partir, s'éloigner, disparaître が筆頭にくる。副詞的代名詞 en は，話し手のいる場所・場面からの離脱・離反を表わす。従って描写の基本は，その場面から始まることになる。

aller について，同じ Bordas の synonymes 辞典では，marcher, cheminer, circuler がまずあげられているが，s'en aller と違う点は，拠って立つ場面は必要としないかわりに，aller 単独での文は成立しないことである。

Je vais à l'école ; Je vais en voiture ; Je vais vite.

私は学校へ行く，車で行く，速く行く。

このように方向を示す状況補語や，様態を示す副詞または副詞相当語を伴なうのが普通である。

日本語の「行く」は，フランス語の aller と s'en aller の両方を表わすことができる。辞典 Français Langue Etrangère からの例で，その点をみてみよう。

(1) Qu'est-ce que tu fais, tu t'en vas ou tu restes ?
君はどうする？　行くかそれとも残るか？

(2) Allez-vous-en tous, toi aussi va-t'en, je veux rester seul.
みんな行ってくれ，君も行きたまえ，僕は一人になりたいんだ。

(1)において，どこかある場所を想定して，そこに行くかどうかを問うならば，tu y vas ou tu restes ? と言うことができる。しかしyを添えずに単に tu vas ou tu restes ? という文は成立しない。aller は何らの状況補語をも伴なわない形では普通使われない。また，tu t'en vas ? と tu y vas ? ではその意味内容が変ってくる。tu t'en vas ? はその場を離れることまでを問題にしていて，その後どこに行くか，何をするかは考えの外にある。一方 tu y vas ? は，"君もそこに行くの？" と行く方向に関心が向けられている。

ここで s'en aller の表わすところをもう少し詳しくみるために，日本の小説の仏訳本の中にでてくる s'en aller を，原文の日本語と対照しながら検討してみよう。主語は有情の名詞 nom animé に限ってみた。

(3) …, il *s'en allait* seul après avoir bu un café dans un salon de thé tout proche. —— *L'enfant de fortune*, 104.
近くの喫茶店に入ってコーヒーを飲むと，一人で立ち去ってしまった。—『寵児』85.

(4) Allez, Kayachan, *va-t'en* vite. — *Ibid.*, 163.
さあ，夏野ちゃん早く行って。—— 同書，136.

(5) Je ne connaissais rien du monde extérieur et tout en me répétant que je voulais *m'en aller*, … —— *Ibid.*, 179.
外のことはなんにも知らなくて，ここから出たいって思い続けながら，… —同書，152.

(6) *Va-t'en* vite, je te dis. —*Territoire de la lumière*, 93.
早く，行きなさいってば。—『光の領分』，93.

(7) …, je ne voyais pas vraiment pourquoi il fallait que je *m'en aille* puisque j'avais été là bien avant lui. —— *Ibid.*, 149.
私の方が先客なのに，なぜ私が引き上げなければならないのか，と居直りたい気持もあっ

た。——同書，132.

(8) Je n'avais pas la moindre intention de *m'en aller* an loin. —— *Ibid.*, 199.
どこかへ行ってしまいたいと考えているわけではなく，…—同書，179.

(9) Ecoute, il faut que tu *t'en ailles* d'un endroit pareil. —— *Ibid.*, 214.
あのね，あなた，そんなところ飛び出しちゃいなさいよ。—同書，191.

s'en aller で訳されている部分の日本語は，「立ち去る，行く，出る，引き上げる，飛び出す」である。表現が少しずつ異っていても，共通している点は，話し手のいる視点・場があって，そこを離脱することにある。"どこに向って" 立ち去るかは問題にならないことが多い。

ところで日本語では，それ自体が方向性をもつ動詞「上がる，降りる，落ちる，帰る，出る」などに「いく」をつけて，「上っていく，降りていく，出ていく」というように，話し手や語り手からの離反を表わすことができる。"離反" に注目すると，これらも s'en aller で訳されることが予想される。

(10) Les enfants étaient contents de *s'en aller*. —— *L'enfant de fortune*, 11.
子供たちは喜んで帰っていく。——『寵児』，7.

(11) Hatanaka *s'en était allé* seul dans un autre endroit, … ——*Ibid.*, 21.
畑中が一人で他の場所に越して行き，…——同書，15.

(12) Takashi se leva de la table et *s'en alla*. —— *Ibid.*, 152.
高志が立ち上って食卓から離れていった。— 同書，127.

(13) Sans me répondre, elle *s'en alla*, chancelante. —— *Territoire de la lumière*, 94.
女はなにも言わず，ふらふらと立ち去って行った。——『光の領分』，81.

(14) *Allez-vous-en*. —— *Ibid.*, 153.
出て行って下さい。—— 同書，136.

「帰っていく，越して行く，離れていく，立ち去って行く，出て行く」がすべて s'en aller で訳されている。しかし日本語の「～ていく」には，このように離反を表わす意味の他に，「～しながら去っていく」というふうに，去っていく際の様態描写をするものと，「～して，それから去っていく」というふうに，二つの動詞を並列したものがあることが，次のフランス語訳からうかがえる。

(15) — et il *s'en alla en descendant* bruyamment l'escalier. — *Territoire de la lumière*, 133.
〔藤野は〕階段を荒々しく下りていった。—『光の領分』，117.

(16) La cliente du rayon des articles pour nouveau-nés acheta les couches à la japonaise puis *s'en alla en descendant* l'escalator. —*L'enfant de fortune*, 256.
新生児用の売り場にいた客は和式のおむつを買い，エスカレーターを下りていった。—『寵児』，219.

(17) Une petite jeune fille que Kôko ne connaissait pas apparut, venant de la cuisine, *posa* le saladier et autant de petites assiettes qu'il y avait de convives au milieu de la table, *et s'en alla*. —— *Ibid.*, 148.
高子には見憶えのない小柄なお手伝いの女の子も台所から現われて，サラダの鉢と人数分の

小皿を食卓の真中に置いていった。— 同書，123.

「おりていく」は，“おりながら去っていく”ことであるのにたいし，“置いていく”は，“置いて，それから立ち去る”と二つの独立した行為であるので，フランス語では，はっきり二つの動詞に分れてしまう。

s'en aller のもつ意味“その場から姿を消す”は，比喩的な意味で「この世から姿を消す，死ぬ」を表わすことがある。次の例は，Trésor de la langue française からのものである。

(18) La pauvre Marthe Roux est morte dimanche dernier, voici quatre jours. Un peu avant de *s'en aller*, n'ayant plus sa tête, elle disait : “Comme c'est joli, ces enfants qui jouent là-bas !” Que voyait-elle ? —— J. Green, *Journal* 1944, 106.

哀れなマルト・ルーがこの前の日曜日に死んでから4日経った。死ぬ少し前，すでに頭がはっきりしなくなっていた彼女はこう言った。「あそこで遊んでいる子供たち，なんて愛らしいんでしょう。」彼女は何を見ていたのだろうか。

ヴェルレーヌの「秋の歌」は，フランスでも日本でもよく知られている詩であるが，その最後の6行は次の句で終る。

Et je m'en vais	げにわれは	
Au vent mauvais	うらぶれて	
Qui m'emporte	こゝかしこ	
Deça, delà,	さだめなく	
Pareil à la	とび散らふ	
Feuille morte.	落葉(おちば)かな。	上田　敏訳

この詩の始まりの部分，Les sanglots longs Des violons De l'automne 以下について泉井久之助氏は，フランス詩のもつイメージと，上田敏の有名な訳詩のかもし出すイメージとの差について言及されている。泉井氏によれば，Les sanglots longs の持つ意味は，ラテン文学の流れから解釈すれば，“それは死に臨んでの断末魔の，すでに間遠(まどお)になった「喘(あえ)ぎ」の「反復」をいうことが多い”という。そして，ウエルギリウスの『アエネーイス』にみられる singultūs longī の例を引きながら次のように述べておられる。

ヴェルレーヌはすでに，ウエルギリウスにこの辞節（syntagma）があることを知っていたにちがいない。本格的な詩作の世界は，その世界としての長い伝統の流れを持っているからである。としてもヴェルレーヌにおける漠として一つに溶けあった四方からのヴィオロンの音(ね)は，おのずから死の影を滲ませながらも，切れめなく続いていた(3)。

この詩に流れる死の影は，Et je m'en vais に始まり feuille morte で終る最後の一節にも色濃く表われていることは言うまでもない。

4. acheter と s'acheter

他人に何かを買い与える場合，acheter qc. à qn. と言うが，自分で自分の物を買うならば，à

qn. の部分はあえて表現する必要はなくなって，acheter qc. となる。ところがその場合，s'acheter と代名動詞を用いることがある。acheter qc. と s'acheter qc. の間には，何らかの違いがあるのだろうか。Petit Robert, Lexis, Robert Méthodique には s'acheter についての言及はない。Grand Robert には，

s'acheter v. pron. (Réfl.) Je me suis acheté une montre. ⇒ offrir(s')

とだけあって，何ら説明はない。

Trésor de la langue française には，

A. — Emploi réfl. S'acheter qqc. Acheter pour soi (cf. sup. acheter qqc. à qqn).

とあって，「自分のために買う」と記されている。自分のために買う場合，acheter だけでも解るのに，あえて s'acheter を使う理由はどこにあるのだろうか。ここでまた，日本語をフランス語に訳した時，どのような箇所に s'acheter が出てくるかみてみよう。

(1) Puis je rentrai chez moi, me maquillai et hésitai longuement avant de passer une robe que je *m'étais achetée* après notre séparation. —— *Territoire de la lumière,* 185.

いったん部屋に戻り，化粧をし，あれこれ迷ってから，藤野と別れて暮らすようになってから買い求めた服に着替えた。—『光の領分』，105.

(2) Kayako *se l'était achetée* (l'=une carte postale) lors de son voyage de classe de l'année précédente. —— *L'enfant de fortune,* 189.

去年の修学旅行の時に，夏野子が自分で買い求めてきた。——『寵児』，161.

(3) Kôko méprisait Hatanaka qui *s'achetait* un manteau de cuir et se commandait un costume alors qu'il ne pouvait même pas régler la note de gaz d'un mois. —— *Ibid.*, 266.

1か月のガス代も満足に払えない時に自分のスーツを誂え，皮のコートを買う畑中を，高子はさげすみ，… —— 同書，228.

(1)の原文「買い求めた服」は，「買った服」に較べて，「本人自身が切望し，積極的に手に入れた服」であろう。もとより物を買う行為は，当人の利益になるのが普通で，不本意ながら買うのは稀かもしれないが，少くとも「～求める」には，買う側の積極性がうかがえる。フランス語の acheter と s'acheter にもそれと同じことが言えないだろうか。買い手の心情に関して，単純形 acheter が中立的とすると，s'acheter はより積極的なプラスの心情を表わすと言ってもよい。(2) についても同じことが言える。「自分が買い求めてきた」絵はがきだけに，夏野子は後々までそれを大切にして，部屋に飾ってあるのである。(4) は，女主人公高子の視点から畑中の行為を述べたくだりであるが，経済的な窮状を顧りみず，"利己的に，ひたすら自分のことだけしか考えずに" 衣類を買う姿が s'acheter, se commander に訳出されている。この場合，両方とも acheter, commander でも行為そのものは表出できる。

"心の底から湧き上る願望"，"自発的な行為" を前面に出すために再帰代名詞が添えられるとしたら，それは動詞 acheter に限らず，他の動詞でも起こりうるだろうことは容易に想像できる。ただし，非情物を主語とする文や，再帰代名詞が不可欠な要素であるような文章は，考察の対象から除かれる。s'acheter ～ がそうであるように，再帰代名詞が構文上いわば "余分な要素，枠外に置けるもの" に限られる。こうした性質のものは，そのすべてを辞書に記載するのは難しい。

se regarder la télé, se lire un roman,
se voir un film, se boire un café,

等がこの種の文として可能であるという(4)。

(4) Je me suis lu un livre dans la soirée.

(5) Je me suis regardé la télé dans la soirée.

私は夜本を読んだ；テレビを見た。

これらはいずれもいわば"個人的な楽しみ"に属するものであって，勉強や仕事など，主語の心情に照らしてみて，義務としてやらなければならない事柄には代名動詞は使われない。話し手の心情を伝える点で，どちらかというと langue parlée に出やすいことも特長である。文の構成要素としては余剰的で，あえて分類すれば間接目的語となり，話語の性格が強く，話し手の心情を写し出すものというふうにその特長を並べてみると，datif éthique と呼ばれる"心性の与格"が呈する特長とぴったり重なり合うことがわかる。これは，心性の与格の再帰代名詞版といえるかもしれない。

ところで，この種の代名動詞が物語の中で使われると，例 (3) のように，行間に語り手側の批判や皮肉めいた色彩を帯びてくることもある。

(6) Il se mange un gâteau.

(7) Il se mange un gâteau tout seul.

彼はお菓子を食べる；たった一人で食べる。

(6) に tout seul を添えただけで，"自分だけで，密に"という非難・羨望のニュアンスが感じられるようになる。このように，きわめて微妙なニュアンスを含む代名動詞の働きは，それがなくとも意味上は充足してしまうだけに，フランス語を母国語としない者にとっては，なかなか捉えにくい部分であるが，表現を豊かにする上では大切な役割であろう。

5. 物を主語とする代名動詞

5-1. La porte s'ouvre.

辞書をひくと，ouvrir には他動詞の他に自動詞もあるので，「ドアが開く」について，ouvrir と s'ouvrir が等しく使われているかどうかから検討しよう。Grand Robert には，この点に関して次のように記されている。

ouvrir v. intr. 1. être ouvert. Cette porte n'ouvre jamais.

s'ouvrir v. pron. 1. devenir ouvert. La porte s'ouvre. La porte s'ouvre toute grande.

上の説明で，"être ouvert"の意味するところは受身ではなくて，状態をいっているのであり，「開いている」を意味する。それ故 Cette porte n'ouvre jamais. は，"このドアは開いていたためしがない"と解せる。一方 s'ouvrir の説明の devenir ouvert は，「(何らかの力が加わって，閉まっていたドアが) 開く」ことを意味する。ouvrir の自動詞用法について，他に Dictionnaire Hachette de la langue française と Logos には，それぞれ次のように記されている。

v. int. Etre ouvert. Porte bloquée qui n'ouvre plus. —— *Dictionnaire Hachette.*

v. int. Etre ouvert, s'ouvrir : cette fenêtre est bloquée, elle n'ouvre pas ; cette porte ouvre mal. —— *Logos.*

Grand Robert, Dictonnaire Hachette, Logos にみられる自動詞としての ouvrir の用例が，

いずれも「開く」ことに関して否定的なのは偶然とは思えず，それは自動詞 ouvrir の使用が限られた範囲内に留まることを示唆している。しかしこのことは一方で，ドアが開かない，開きにくい状態が s'ouvrir で表現されることを防げはしない。

Cette porte ne s'ouvre jamais.

Une porte bloquée qui ne s'ouvre plus.

Cette fenêtre est bloquée, elle ne s'ouvre plus.

Cette pore s'ouvre mal.

上のように，代名動詞を使ってドアの開きぐあいの悪いことを表現することは可能であり，これについてフランス人インフォーマントは，上の用例でも自動詞ではなくむしろ代名動詞を選ぶと述べた。結論として,「開く」を表わす動詞 ouvrir については，他動詞 ouvrir ⟶代名動詞 s'ouvrir ⟶自動詞 ouvrir という過程をたどって自動詞化が進んでいるわけではないことを確認した上で本題に入ることにしよう。

ドアが開いた，開いている状態は，次のように言うことができる。

(1) Voilà la porte est ouverte. Entrez, s'il vous plaît.
さあ，ドアが開きましたよ。お入りください。

(2) La porte est toujours ouverte.
ドアはいつも開いています。

たった今"開いた"のも，さっきも今も"開いている"のも，フランス語では同じ言葉で表わされる。(1) の文では，ドアを開けたのは話し手をも含む誰か人手によるものであることが感じられる。しかしここでの être＋過去分詞は受動態ではない。すでに開いてしまっているドアについて，受身の現在形で語ることはないからである。(1) (2)ともに，動詞は être で，ouverte は主語の属詞である。

ドアが開くまでの，開ききる直前までについてはどのような表現方法があるか。

(3) Le portier ouvre la porte.
門番がドアを開ける。

(4) La porte est ouverte par le portier.
ドアは門番によって開けられる。

(5) On ouvre la porte.
誰かがドアを開ける。

(6) La porte s'ouvre.
ドアが開く。

(3) の過程をドアの側から始めたものが (4) の受身文である。ouvrir のような瞬間的動作を表わす動詞では，La porte est ouverte. のように動作主補語がない文は，"完了"や"完了した結果としての状態"と解釈される。一方，(4) のように動作主補語が明示されていると，フランス語では，まだその動作が終了していない，進行中であると受けとめられる。(5) は，動作主を特定しない，特定する必要がない，特定できない時に使われる。(6) は，ドアが開くまでの過程を，ドアそのものの上に起った変化として捉えている。

(7) La porte s'ouvre automatiquement.
ドアが自動的に開く。

(8) La porte s'ouvre avec le vent.
ドアが風で開く。

(9) *La porte s'ouvre par Marie.

(9) は，実際には人為的な力でドアが開くにせよ，話し手としては，人為的な要素を排除した現象として述べているので，(7) や (8) のように“自動的に”，“風で”開くのはよいが，“マリーで開く”は成立しない。

(10) Tiens, la porte s'est ouverte. Qu'est-ce qui va paraître?

あらっ，ドアが開いたわ。何が出てくるかしら。

(1)と(10)におけるドアの状態は同じである。しかしドアを見ている側の視点には違いがある。(1)では，語り手自身がドアを開け，(あるいは人に開けさせ，) 入るように勧めている，という解釈が成り立つ。ところが (10) では，語り手は目の前でドアが開くのを眺めているのであって，(1)の解釈は当てはまらない。

(11) Dans un cambriolage, la porte a été ouverte.

押し込み強盗で，ドアがこじ開けられた。

受身構文は，たとえそれがはっきり言及されていなくても，作為者の存在を前提としている。動詞を行為そのものとして捉えているのである。(10)—(11)タイプの対応を，よくとりあげられる次の表現でみてみよう。

(12) Cette maison s'est construite en un an.

この家は一年で建った。

(13) Cette maison a été construite en un an.

この家は一年で建てられた。

(12)と(13)は同じ意味であるといってよいだろう。しかし，それぞれの表現効果ともいうべきものには違いがある。両者を較べると，(12)の方が描写的で，“あっ，もう家ができている，一年で（知らないうちに，ひとりでに）建ってしまった”，というニュアンスが強い[5]。

5-2. Le blé se vend cher.

“ドアが開く”については，有情の動作主がいなくても，何らかの原因で起りうることなので，他動詞 ouvrir → s'ouvrir→ 自動詞 ouvrir という推移も考えられ，事実限られているとはいえ，自動詞にもなることは先にみたとおりである。

(1) Le blé se vend cher.

小麦は高く売れる。

動詞 vendre は，売り手と売る物がなければ成り立たない。ところが代名動詞は動作主補語を容認しない。売り手の都合に関係なく“売れていく”のである。かつては，代名動詞も動作主補語を伴なうことができたが，やがて統辞的にそれは許されなくなって，動作主補語は受動態だけのものとなった。動作主が背後に控えているものとそうでないものが構文上はっきり区別されるようになったのである。「小麦が高く売れる」は，いわば小麦自体の性質を物語っている。「売れる」は日本語では自動詞，英語でも“sell at a high price”と自動詞である。フランス語では自動詞にはなりえない。

(2) *Le blé vend cher.

(3) *Le blé se vend.

(3) のように“売れる”だけでは意味をなさないが，ちょっと変えれば文として成立する。

(4) Le blé ne se vend pas cette année.

小麦は今年売れない。

ところで，いわゆる受動態との関係はこの場合どうなるであろうか。

(5) Le blé est vendu.

小麦は売れた。

(5)は，「小麦は売れた，もう残っていない」という状態を示す。しかし次はどうだろう。

(6) Le blé est vendu cher.

小麦は高値で売られている。

(5)と(6) は，副詞 cher があるかないかの違いであるが，être vendu cher は受身に，être vendu は動詞 être と属詞 vendu に解釈される。

(7) Le blé est vendu cher par le voisin.

隣家では小麦は高値で売られている。

(7) は統辞的には正しい文章であるが，実際の場面でこれを使うとなるとやや不自然で，こういう場合次のように，能動態で言うのが普通だという[6]。

(8) Le voisin vend le blé cher.

(1)と(6) についても，文章は正しく，表わす内容も同じである。それでは，小麦の買い手，売り手はどちらの表現を選ぶかというと，インフォーマントによれば，(6)の受身を使うことはまずない。Le blé se vend cher. か，もっと簡単に Le blé est cher. と言うに違いない。(6)の受身の文は，たとえば新聞・雑誌の解説記事には最適であろうという。不定代名詞 on で始まる文，代名動詞の文，受動態の文には，意味のレベルを超えた，表現性の点で違いがあるようである。

動詞が過去時称になった場合，代名動詞は，一定の時期に一定の場所でみられる一時的事柄を表現するのに適している。

(6) Dans tout le pays, le blé s'est vendu cher cette année.

今年は全国的に小麦が高値で売れた。

ここで主語を，総称を示す定冠詞つき名詞 le blé から cette maison に変えてみよう。

(10) *Cette maison se vend cher.

日本語では，「この家は高く売れる」という文はなんら問題がないが，フランス語の (10) はおかしいという。

(11) Cette maison se vendra cher.

この家は高く売れるだろう。

(11)では“家”の性質を述べているのではなく，Je pense que cette maison se vendra cher. と，“家”についての一つの判断を示している。同じ動詞でありながら，主語の在り方をちょっと変えただけで，発話者の視点が微妙に揺れ動くことに注意したい。

(12) Les maisons en Bretagne se vendent cher.

ブルターニュでは家屋は高値で売れる。

(13) Cette maison est vendue.

この家は売れた，売却済み。

(14) Cette maison est vendue cher.

この家は高値で販売中，売りに出ている。

(15) Cette maison s'est vendue cher !

この家は高値で売れたものだ。

(16) Cette maison a été vendue cher.

この家は高値で売却された。

se vendre が現在でも，(11)の「ブルターニュにおける家屋」のように，主語に総称的な名詞を置くと可能になる。(15) は (16)に較べて，個人的な印象の表出が色濃い文となる。

5-3. Sa voix s'entend de loin.

代名動詞における，現象的，自然発生的な捉え方や視点が，感覚動詞に適応された例をみてみよう。

(1) Sa voix s'entend de loin.

あの人の声は遠くからでも聞こえる。

「聞こえる」は作為のない感覚動詞であり，日本語では自動詞である。フランス語でも表現を変えれば自動詞を使ってほぼ同じ内容を伝えることができる。

(2) Sa voix porte bien.

あの人の声はよくとおる。

s'entendre に近い表現として， se faire entendre があるが，「聞こえる，耳に届く」という可能表現ではなくて，「(物音が，人の話し声が) する」というほどの意味である。

(3) Un cri se fit entendre au loin.

遠くで人の叫び声がした。

(3) における動きのある表現は s'entendre には向いていない。

(4) *Un cri s'est entendu au loin.

しかし，物語りの中で，単純過去の形ならばありうるという。

(5) Un cri s'entendit au loin.

「遠くで叫び声がした」を On で始めれば次のようになる。

(6) On entendit un cri au loin.

視覚に関する表現はどうか。

(7) La flèche de l'église se voit de loin.

教会の尖塔が遠くから見える。

(7) を自動詞文にしてみよう。

(8) La flèche de l'église est visible de loin.

もともと人々の視野の中にある状態をいうのではなくて，視野に入ってくる，見えてくるという意味で動詞 se voir を使うことはできるだろうか。

(9) *La flèche de l'église s'est vu de loin.

例文 (9) は成立しないが，これが物語中で単純過去であったならば可能になる。

(10) La flèche de l'église se vit de loin.

しかし，"見えてくる"という意味でもっとも自然な表現としては，apparaître が相応しい。

(11) La flèche de l'église apparut au loin.

匂いについてはどうだろうか。

(12) La rose sent bon.

バラはよい香りがする。

(13) *La rose se sent bon.

(12) の sentir は自動詞そのものであって，(13) のように代名動詞にはしない。

(14) La rose se sent de loin.

バラは遠くからでも匂う。

(15) *La rose sent de loin.

(16) On pent sentir la rose de loin.

(16) の意味では (14) の代名動詞しか使えず、(15) は成立しない。

"(音が) する" と違って, '(匂いが) する" には se sentir も se faire sentir も相応しくない。

(17) *Une bonne odeur se sentit.

(18) *Une bonne odeur se fit sentir.

自然な文としては次のようになる。

(19) Une bonne odeur se dégagea.

良い匂いがしてきた。

s'entendre 聞こえる, se voir 見える, se sentir 匂うなどの代名動詞は, いずれも主語名詞の恒常的な状態・性質を描写するのに適している。音や風景, 香りが移りゆくものとして捉えられると, se faire entendre, apparaître, se dégager などに替わる。

5-4. Ce mot ne s'emploie plus.

主語名詞の性質を表わす代名動詞構文という点では感覚動詞の場合と共通しているが, ここではその性質がある種の規範を帯びている類のものである。

(1) On n'emploie plus ce mot.

(2) Ce mot n'est plus employé.

(3) Ce mot ne s'emploie plus.

この言葉はもう使われない。

(1)〜(3) は表現はそれぞれ違うものの, 同じ意味である。(2) は受身の行為というより, employé はすでに形容詞として, 動詞 être とともに状態を表わしているとみるべきであろう。

(4) Ce tissu se lave à l'eau tiède.

この生地はぬるま湯で洗う。

(5) On lave ce tissu à l'eau tiède.

(6) *Ce tissu est lavé à l'eau tiède.

(2) は自然な文なのに (6) が成立しないのはどうしてか。それは employer が, 継続・状態性の強い意味であるのにたいし, laver は瞬間的・一時的動作を表わすことによる。employer の過去分詞は形容詞化しやすく, 恒常性を帯び易いが, laver の過去分詞は動作そのものを表わすために一回的であり, 時間的な広がりを保ちにくい。laver を使って, 動きのある, 動作そのものを表わす次のような文には, 代名動詞ではなく, 受動態がよくあう。

(7) Le tissu est plongé dans un bain colorant et ensuite il est lavé à l'eau tiède.

織物を染色液につけて, それからその布をぬるま湯で洗う。

(4) は, もし商品の取り扱い表示であるなら, Laver ce tissu à l'eau tiède「ぬるま湯で洗うこと」と, より効率的で簡潔な表現が使われるであろう。

s'ouvrir から始まって se laver に至るまでの動詞は, 不定代名詞 on を主語にした他動詞文で同じような内容を表現できた。このように, 無情物主語で始まるある種の代名動詞構文では, その主語名詞を他動詞文の直接目的語の位置に置くことができるために, この種の文は, 俗に代名動詞の "受身的用法" と呼ばれる。しかしこの "受身的用法" という説明は多くの誤解を生みやすい。"受身的用法" をすなわち受動態構文のことであるとして, La porte s'ouvre.「ドアが開く」は意

味上，La porte est ouverte「ドアが開いた，開いている」に等しいなどとされかねないからである。最後に，on＋他動詞構文と，代名動詞や受動態構文とがこれまでのようにきれいに対応しない例をみよう。

5-5. La flèche de l'église se dresse dans le ciel bleu.

(1) La flèche de l'église se dresse dans le ciel bleu.
教会の塔が青空にそびえ立っている。

(1) の代名動詞を自動詞で表現すれば (2) になる。

(2) La flèche de l'église pointe vers le ciel bleu.

しかし dresser を他動詞にして On で文を始めることはできない。

(3) *On dresse la flèche de l'église dans le ciel bleu.

(3) を正しい文にするには，dresser を construire か édifier に変えなければならない。

(4) On édifie la flèche de l'église dans le ciel bleu.
教会の尖塔を青空に建てる。

しかし (1) と (4) の間には，これまでの例にみられたような意味上の共通性はない。se dresser が状態を表わしているのにたいして，édifier は限界のある行為を意味する。dresser の受動態はどうか。次の文も不可である。

(5) *La flèche de l'église est dressée dans le ciel bleu.
教会の尖塔が青空に立っている。

動詞 dresser の他動詞的用法の可能性を探ってみると，次のような文にたどりつく。

(6) L'église dresse sa flèche dans le ciel bleu.

(1) と (6) は同じ情景を表現している。(6) において，確かに dresser は他動詞であるが，受動態に変えることはできない。dresser の他動性が，構文上だけのことであって，意味の上で主語以外のものに働きかけていないからである。

おわりに

フランス語の代名動詞が，自動詞なり他動詞から派生したもの，つまり間接目的や直接目的補語がたまたま主語自体と同一であることですべて説明がつけば，フランス語を外国語として学ぶ者にとって，代名動詞はもっとわかり易いものになったに違いない。しかし実際には，これまでみてきたように，代名動詞と自動詞の共存，manger～と se manger～にみられるような二重性，俗に本質的代名動詞と呼んで文法説明の枠外に置かれるグループなどに出会うと，フランス語は，動詞にさまざまなニュアンスを加えたいという欲求を，代名動詞という弛緩地帯によって解決してきたのではないかとさえ思えてくる。この弛緩地帯を細かくみていけば，フランス語を母国語としている人たちがなにげなく使っている表現にこめられた，われわれ外国人には気ずかないような言葉のニュアンスの一端が見えてくるのではなかろうか。言葉のニュアンスなどで片付けるには，代名動詞は余りにも重すぎるかもしれない。～ oneself 形が，その重い再帰代名詞を置き去りにして，いくつかの例で動詞の自動詞化がみられた英語と違って，フランス語の場合，再帰代名詞 se の有無が多分に恣意的だった時代を経て今日まで残ってきた代名動詞の果たす役割は，自動詞の数の少なさと相俟って，きわめて大きい。

日本語で再帰代名詞というと，"自分，自分自身，我が身，それ自体" ということになろうが，

主語と同一の個体があえて動作の対象として表出されるのは，強調以外は余り一般的ではない。ところで，B. Pottier 氏は，その著 *Linguistique Générale*『一般言語学』の日本語版への序で次のように述べている(7)。

自然言語の意味の仕組みは，言語ごとに表現手段こそ異なりはするものの，本性は同じである。諸言語の多様性は「自明」であるけれども，人間思考が基本的に一つであることと関連づけて考えなければならない。

"人間思考が基本的に一つである"としたら，日本語のどういう表現がフランス語の代名動詞に置きかえられるのか。日本語研究が盛んになっている近年，母国語との比較ということも視野に入れながら，考察の対象を今後さらに広げていきたいと思う。

［注］

(1) 森田良行（昭和59年），p. 8.

(2) ヴァルトブルク（1976），p. 112.

(3) 泉井久之助（1978），p. 52.

(4), (5), (6) 本稿の執筆にあたり，Dominique Hézard－中村夫人にフランス語についての判断をお願いした。同夫人に心から謝意を表したい。

(7) ポティエ（1984），v.

［例文の出典］

Le Roi se meurt, Ionesco, col. folio, Gallimard, 1963.

L'enfant de fortune, Y. Tsushima, traduit par R.-M. Fayolle, Des femmes, 1985.

Territoire de la lumière, Y. Tsushima, traduit par A. et C. Sakai, Des femmes, 1986

『寵児』，津島佑子，河出書房新社，昭和53年.

『光の領分』，津島佑子，講談社，昭和54年.

［参考文献］

Boons, J.-P., Guillet, A. et Leclère, C. (1976) : *La structure des phrases simples en français, constructions intransitives*, Droz, pp. 120-163.

Kayne, R. (1977) : *Syntaxe du français*, Seuil, pp. 320-375.

Ruwet, N. (1972) : *Théorie syntaxique et syntaxe du français*, Seuil, pp. 87-125.

Stéfanini, J. (1971) : 《A propos des verbes pronominaux》, *Langue Française*, No. 11, pp. 110-125.

泉井久之助（1978）：『印欧語における数の現象』，大修館.

森田良行（昭和59年）：『基礎日本語Ⅰ』，角川書店.

ポティエ（1984）：『一般言語学』，三宅・南館訳，岩波書店.

ヴァルトブルク（1976）：『フランス語の進化と構造』，田島宏他訳，白水社.